

# 公開講座2019報告

2006年に始まる「公開輪読会」は2017年より「親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座」と名称を変え、今年度は2019年12月より翌年2月にかけて「信」という課題」という共通テーマのもと、開催された。

「私には信仰があり、勇気があり、智慧がある」と釈尊は語る。釈尊を支えた「信」とは何であったのか、仏教徒たちは幾度も課題としてきた。そうしてみずからの足もとを確認してきたのだろう。「信」という課題は仏教の土台ではないか。



3名の研究員が『大乘起信論』、ソ連領被抑留者の信仰、『大智度論』の切り口から講義（各3回）を行ない、参加者の方々と共に学ぶひと時を得た。2月26日の最終講（第10回）ではその3名を交えて、講座全体をふりかえる機会をもった。

『大乘起信論』のインド撰述説についてどう考えるか。「収容所」とは人間にとって、いかなる場所なのか。曇鸞にとって『大智度論』とは、親鸞にとって空とは。最終回の質疑は特に活発であった。



## 大乘の「信」を起こす

—『大乘起信論』を読む—

親鸞仏教センター研究員 藤村 潔

公開講座で『大乘起信論』（以下、『起信論』）のテキストを初めて取り扱った。大正蔵の分量で言えば、僅か9頁程ではあるが、しかしその内容は甚深広大な教説と言えるであろう。本書はインドの馬鳴菩薩造と伝わるが、その撰者は疑わしく、現在では中国において成立したとする説が有力視されている。いずれにせよ、『起信論』が広く伝播したのは東アジア仏教圏に他ならず、様々な思想家らがこぞって註釈書を撰述した。

本講座では「信という課題」に立ち、『起信論』本文の読解を試みた。『起信論』は一切法の問題を「衆生心」という視座に立ち、迫るものと言える。例えば、「一心二門三大四信五行」と暗唱するように、本書は信心の構造を体系化していく。後半のクライマックスでは、第四「修行信心分」という一節が設定されている。その中では、従来の菩薩道で語られるような「信じた後に修行する」のではなく、「信心を修行する」と展開されている。この箇所の要点を言えば、大乘の「信」を起こすとは、必ず五行（施行・戒行・忍行・進行・止観行）を伴うというのである。この点が真宗における聞名の信、すなわち「与えられる信」とは見方が異なるものと言えよう。『起信論』の基本的立場はあくまで「生み出す信」であり、その基盤は「衆生心」に他ならない。そのため、衆生の上において「心真如門」（さとり）と「心生滅門」（まよひ）の両面が立てられる。後者の心生滅門は最も分量が多く、「如来蔵」と「阿梨耶識」が同じ文脈で論説される。特に阿梨耶識の文脈では「覚・不覚」が論じられ、さらに「始覚・本覚」の概念が生み出され展開していく。

以上、『起信論』における「信という課題」は、如来蔵や阿梨耶識といった概念が説かれる中期大乘経典の教説に基づく「衆生心」に軸足を置いたため、たとえば初期大乘経典で説かれる如来そのものの問題や如来の願い（本願や一乗）は何であるのかといった教説はほぼ見受けられない。これは『起信論』の思想史的背景を考える上でも極めて重要な問題である。

## 「收容所の親鸞」という問い

— ソ連領被抑留者の信仰を読む —

親鸞仏教センター研究員 東 真行

副題にあるように今回の講座の目的は、いわゆる「シベリア抑留」において旧ソ連領に連行され強制労働を課された被抑留者の信仰について、その一端を読み解くことにある。その際、西元宗助(1909-1990)と石原吉郎(1915-1977)の二人が遺した言葉を主に扱う。

当然ながら、親鸞は20世紀の收容所にはいない。しかし、「一人居て喜はば二人と思ふべし、二人寄りて喜はば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」という言葉を想起するとき、收容所にて聞き届けられた言葉を通して、親鸞がそこに身を置いていたと私には思われる。西元の『ソビエトの真実』(教育新潮社、1980)によると、西元は石原の要請に応じて、收容所のなかで『歎異抄』の講義をしたという。西元はいかなる問いをもって親鸞に向き合ったのか。危機の真只中におかれた人間にとって、迷いを超える言葉としての親鸞とは何であったのかを明らかにしたいと考え、講座に臨んだ。

敗戦後、旧満洲の建国大学に勤めていた西元はソ連に連行され、抑留生活が始まる。そこで西元を支えたのは、直前まで鼓吹されていた戦時教学ではない。実際の危機において省みられたのは、『歎異抄』であり「正信念仏偈」の一節(「法蔵菩薩因位時」)等であった。西元は、極重の悪人であるみずから法蔵菩薩が念仏となってあらわれ出るという感動に、收容所のなかで再び出会っていく。

西元は「餓鬼畜生道に陥った」と述懐する生々しい現実を生きた。のちに石原がいう「歎異抄的な出来事」が生じ、罪悪が現前する世界である。西元はそれを「歎異抄の世界」とあらわす。まずは何より飢餓や暴力が人間性を侵す世界であり、同時にそれゆえになお強く本願がはたらかざるを得ない世界である。その收容所の現実のなかで、西元と石原が共に尋ねたのは、『歎異抄』が説く一人の自覚と、念仏の信心に法蔵菩薩があらわれるという親鸞の思想であったと考えられる。

## 般若波羅蜜の信と行

— 『大智度論』を読む —

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

菩薩の〈般若波羅蜜〉という実践課題と密接にかかわる〈空〉というものの見方・考え方は、大乘仏教の重要概念である。例えば『般若心経』冒頭に、「観自在菩薩が、深遠なる般若波羅蜜を行っていた時、五蘊がすべて空であることを見抜き、一切の苦厄を救った(観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄)」とあることは広く知られており、ここでは空の観察による苦悩からの解放が菩薩の実践として語られている。さらに、龍樹の著作として伝承され、中国仏教の仏典解釈にも大きな影響を与えた『大智度論』にも、「菩薩が般若波羅蜜を行ずる時、普ねく諸法が皆空であり、その空もまた空であることを観察した(菩薩行般若波羅蜜時、普観諸法皆空、空亦復空)」(卷三十四)とあり、『般若心経』の「色即是空、空即是色」を<sup>ほうふつ</sup>髣髴とさせる「空亦復空」という表現で、般若波羅蜜を実践する菩薩のものの見方・考え方を説示している。

本講座では、〈般若波羅蜜〉や〈空〉をキーワードに、『大智度論』を読みながら大乘の仏道における信仰と実践を考察した。特に第1回では「信」を、第2回・第3回では六波羅蜜や慈悲・念仏三昧といった菩薩の「行」を取り上げ、般若波羅蜜に裏付けられた菩薩の信仰と実践とが、何を課題として、その生き方がわれわれに何を問いかけているのかを主題とした。『大智度論』の説く〈信〉は、経典冒頭の「如是我聞」の意を示す際に「仏法の大海は信もて能入と為す」(卷一)との有名な言葉でその重要性を説くことが知られるが、一方では自己の信仰にとらわれ他者を批判するようなことを問題視し、信によって心のとらわれが起こるようなあり方に注意を促す点にも特徴がある。同様に〈行〉においても、「不惜身命」に基づく衆生救済を目的としながらも、心の執着を問題視し、そうした行為そのものにとらわれるような実践のあり方に警鐘を鳴らす一面が見られた。このような点に、大乘仏教が課題とする菩薩道の特色があることを確認した。